第 51 号
（年４回発行）
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

二〇一二（平成24）年度 学位記授与式が挙行される

2012（平成24）年度学位記授与式

去る、３月19日（火）に２０１２（平成24）年度の学位記授与式が本学体育館にて挙行されました。文学部第39回、社会福祉学部第11回、看護学部第５回、大学院社会福祉学研究科修士課程第９回、文学研究科修士課程第７回、総勢１５６名が所定の学業を卒業並びに修了し、学舎を巣立っていきました。一人一人晴れやかな笑顔で吉岡学長より証書を頂き、小雨の中始まったものの、社会人への一歩を踏み出した、その時には雨も上がり、天気もみんなを祝福しているかのように晴れ渡りました。卒業生・修了生の皆様の前途に神様の導きと祝福が豊かにありますようにお祈り申し上げます。ご卒業・修了、本当におめでとうございます。

理事長賞授与

二〇一二（平成24）年度 卒業式式辞

学長　吉岡　利忠

本日、弘前学院大学２０１２（平成24）年度の（文学部39回生、社会福祉学部11回生、看護学部５回生ならびに大学院社会福祉学研究科修士課程９回生、大学院文学研究科修士課程７回生）の学位記授与式を挙行するにあたり、ここに式辞を述べる機会を与えられたことは、私にとりまして誠に光栄であります。

本日、ここに総勢１５６名の皆さまが弘前学院大学から卒業・修了して行きます。この中には、目出度く大学院を修了しました文学研究科の３名も含まれます。日頃の仕事や教育活動などで多忙の中、大学院の授業のみならず修士論文作成に多くの時間を費やし、論文の主査、副査の先生方の厳しい評価をクリアし、見事、修士号を受けることができました。その努力には敬服するばかりです。この度、大学を卒業する皆さんも、それ以上の知識や技能を学ぶ必要性に迫られた時には、本日、修士号を頂いた先輩諸氏に見習い、大学院への門を叩いて下さい。

さて、私が日頃思っていることを少しお話ししたいと思います。人生において最も大切なことは、幸せでかつ心温まる場所、すなわち居場所があることだと思っています。その居場所とは、大きく括って一つには家庭、二つ目には学んだ学校、そして職場の三つだと思います。帰りたくてワクワクする家庭、毎日のように通って勉強したくなる学校、さぁやるぞと働きたくなる職場です。それらの居場所には、家族がいて教師がいて友人がいて仲間がいて同僚がいて先輩がいて、その中心的存在は自分でありフェースブックになぞらえると相関関係とでも言いますか、その結びつきは単なる間接的なものではなく密度の濃い有機的なものであります。その存在は愛情があってこそ成り立つものであり、その上、感謝という気持ちを含み、また、謙虚さがベースに存在し、それらの全てが上手く調和がとれていることが大切だと思います。

愛情と感謝と謙虚。愛情とは他の人を支える心、感謝とは何かにたいする祈り、謙虚とは相手を重んじる態度でしょう。その中の祈りについて考えてみますと、祈りの対象は神仏でありあるいは大自然に存在するものでも良いでしょう。弘前学院大学では教会と同様にお祈りをします。礼拝堂ではキリスト教関係のイベント、結婚式やお葬式があればミサやその儀式も催されます。私どもの周りにはお寺や神社もあります。私たちは慣習でお寺にもお参りしますし神社にもお宮参りをします。感謝の意味をお祈りすることだとすると、私たちの周りではそれほど違和感もなく全てが協調しあい、毎日を暮らしているようです。

本日、卒業・修了する皆さまは、プロテスタント派のキリスト教に根付いた教育を受けてきました。愛情・感謝・謙虚、この三つは弘前学院大学の環境で自然と皆さんの心や体に滲みわたっています。ご存じのように、私どもの大学の建学の精神は「畏神愛人」です。神を畏れ、人を愛することです。さらには、愛情・感謝・謙虚の意味合いも根底に流れているものです。このような精神・態度に基づき私たちの大学では人類文化の発展、保健医療福祉の向上のため世界的視野をもった人材を数多く輩出しております。多くの先輩がいる社会に、皆さまは大いに自信を持ち飛び出して下さい。どんな環境に遭遇しても特に人と人とのコミュニケーションの場では、この建学の精神が皆さまの心の底に流れていることで自身の求める方向が堂々と示されることと思います。

昨今は、社会情勢、経済情勢ともに大変厳しいものがあり、就職については正に氷河期とも言われます。大学で開催される３学部を対象にした就職セミナーは恒例の行事になっていますが、このセミナーには県内、東北地方はもとより首都圏から多くの会社、企業、医療関係施設が参加しております。その甲斐もあり現在の就職率は、青森県全体および国で纏めている就職率を上まっており、全体で90・２％（３月18日現在）であります。今後さらに内定率が増え、最終的には１００％になるものと期待しております。

さて、学校法人弘前学院は創立１２７年目に入ります。歴史と伝統のある大学に在学したことに、堂々たるプライドを持って欲しいと思います。

また、学校法人弘前学院には、聖愛中学校・聖愛高等学校があり、中・高・大そして大学院までの一貫教育を推し進めていますし、北東北を代表とする教育機関です。この一貫教育はその必要性を充分意識した結果ですし理事長ならびに全教職員の熱い想いを背景にし、この地域から望まれた結果生まれた教育機関です。聖愛中学校は大学の看護学部と同様にこの３月に第５回生を送り出しました。３月１日、弘前学院聖愛高等学校の卒業式があり、聖愛中学校の卒業式は昨日でした。中学校では第２期生として入学した生徒が聖愛高校までの６年間を聖愛で学び見事難関大学へ合格した生徒たちもちろん弘前学院大学に入学する、生徒たちのことが話題になっていました。正しく、聖愛人（ヒト）そして弘前学院大学の略称である弘学をとって弘学人（ヒト）と言っていいかも知れません。

皆さんは、これから社会に出て色々なことを経験するでしょう。ある専門プロジェクトチームに所属したり、ある部課署に配属されたりあるいは最初から独りで仕事をしなければならない環境に置かれたり、その中にあっては全てに上司がいるとは限らないし、いても手とり足とり懇切丁寧な指導や教育はないかも知れません。どんな場合でも、仕事に就いたらそれを達成するために前向きに進んでいかなければなりません。発生した問題は自身で解決しなければ先に進みません。いわゆる問題解決型の姿勢が必要になりましょう。問題解決型とは、誰から言われてやるという受動的なものではなく自ら行動を起こして対応するという能動的な態度が備わっていなければなりません。この姿勢、皆さんにはキチンと備わっています。それは、大学での授業や実習で修得されています。

私は、将来、皆さんが素晴らしい伴侶を得て、行く行くは皆さんのお子様たちが弘前学院聖愛中学校・高等学校そして母校となる弘前学院大学を目指していただき、弘前学院の歴史を共に作っていただきたいものです。そのような、皆さんに愛される大学になるように私ども教職員は一丸となって教育環境、研究環境、運営環境を改善すべく前進したいと思います。

（２０１３(25)年３月19日(火)）

本多庸一とキリスト教(23)

護教の発刊

学校法人弘前学院
理事長　阿保　邦弘

「護教」第一千号の序文は「護教が日本におけるメソジスト三派の機関として生まれたるは実に明治二十四年七月七日なりき、爾来年を閲（けみ）する十有九、今や第一千号に達す、号を重ぬる必ずしも祝すべき事にあらざらん、しかれども護教がその間に於いてよく教会新聞の本領を守りメソジスト主義の発揚に務めたる一事、聊（いささか）か天下に誇るべく、以て祝するに足るべし」と書き出されている。本多はこの最初の管理、発行人つまり責任者であり、山路愛山が初代の主筆であった。

弘前メソジスト教会を「弘前美以（みい）教会」と呼ぶことがある。これは、明治六年のキリスト教禁教の解除とともに、欧米諸国からキリスト教の伝道も始まった。これ以前に、一九世紀の初めから中国に伝道者が送られていた。中国から漢訳聖書や神学書の類まで大量に入ってきたのもそのためである。メソジスト派の正式の名称は、メソジスト・エピスコパル・チャーチ（メソジスト監督教会）であり、中国ではこれをちじめて音訳し「美以教会」といった。

メソジスト派というのは、一八世紀イギリス産業革命のさなか、当時の社会情勢のひずみに生じた社会の暗黒面に伝道すべく生まれたものである。この初代の指導者たちはオクスフォード大学内で厳しい規律ある生活を守っていた。彼らはメソド（規律ある方式）を重んずる「几帳面で固苦しい」連中とされ、この呼び名は彼らにつけられたニックネームであった。

メソジスト派はやがてアメリカに渡って大きな波となり、一九世紀の半ばにはアメリカ最大のプロテスタント教派となるにいたった。南北戦争の結果、メソジスト教会も南北に分裂しアメリカ・メソジスト監督教会とアメリカ南部メソジスト監督教会と対立したが、これにカナダ・メソジスト教会を加えたものがいわゆるメソジスト三派でありそれぞれ独自の海外伝道を展開していったのである。これら三派は本国でそれぞれの歴史的背景も違っていて合同するなど夢にも考えられなかった。しかし、我が国において三派分裂の意味がなく、三派の合同は早くから考えられていた。その手始めとして明治二四年に三派共同の機関誌として週刊新聞「護教」が刊行されたのである。明治四〇年に米国北美以教会、カナダ美以教会、米国南美以教会の三派が合同し本多庸一がその初代監督に就任した。

この「護教」はその後何回か表題を変えたが、メソジスト教会が日本基督教団の中に合併された後も存続し、昭和一九年に第二四九一号をもって姿を消した。全国の地方教会の動向を伝える貴重な資料の宝庫である。各教会は連絡員を決めて情報を提供し、牧師自身がリポートする場合もあった。しかし、昭和に入ると中央情勢が主となり、地方記事が少なくなってゆくのは、やむを得ないことであった。

護教
第一千號
日本に於けるメソヂスト教會の使命を論ず

（以下次号）

弘前学院校友会より母校援助金寄贈される

去る、3月18日（月）に、弘前学院校友会中田悦子会長より2012年度の母校援助金30万円が寄贈されました。この援助金は毎年寄贈され、今年は、プロジェクターを購入しました。卒業生の皆様方の熱い援助に心から感謝申し上げます。

地域総合文化研究所『地域学 別巻』発行について

運営委員　西東　克介

本研究所が年一回発行する『地域学』は、第十巻をもって二〇一二年三月に終結しました。本年度から『地域学』としては発行せず、来年から新しい企画で発行する予定です。本年、それへの橋渡しとして『地域学　別巻』が発行されることになりました。『地域学　別巻』の内容は、本研究所が開催した二〇一〇年・二〇一二年の2回シンポジウムの記録です。

この2回のシンポジウムは、まさに本研究所の理念と笹森建英所長の長年の思いの大切な一部を伝えたものだと思います。「地域・地方から文化を発信する」ことを願い続けた所長の地道で粘り強い「人間力」によって、これが緩やかでも討論者や出席者に伝わり、やがて津軽全域、そしてグローバルに広がっていくことを願ってやみません。

二〇一〇年のシンポジウムは、まず人間の負の部分を考え、そこからこれをなんとかプラスに転じることができればとの思いで開催しました。民主主義国家において政治における負の部分を考えることは、単に政治家のみを批判するのではなく、私たち自身のことも考えなければいけません。こうした点を頭のすみに置き、身近な政治と文化がどのように繋がっているかを考えてもらえればと思います。

二〇一二年のシンポジウムは、人間の正の部分を考え、これがマイナスにならないようにするにはどのように考え行動すればよいかについて討論しました。具体的には、弘前のねぷた祭りと青森のねぶた祭り、そして津軽民謡を題材にしてみました。祭りには、良かれ悪しかれ、我が国文化の象徴であるタテ型の集団主義がよく現れます。この文化（思考・行動パターン）は、我が国の「ムラ社会」や「世間」にもあてはまります。このシンポジウムでは扱っていませんが、「いじめ問題」の分析にも適用できます。

目に見える文化は、目に見えにくい文化によって支えられています。目に見えにくい文化はプラスにもマイナスにもなる身近な生活の中から、じっくりと時間をかけて育まれていきます。だからこそ、身近な人達が重要です。地域・地方もこうした底力を養う土壌となるのです。是非読んで頂ければと思います。

談話室

子ども時代の心象風景

文学部　講師　須川　公央

今冬の弘前は例年になく豪雪だったせいか、自室でひとり物思いに耽ることが多かった。雪がしんしんと降りしきるなか、寝床に入って目を瞑ると、過去の記憶が走馬燈のように頭の中を駆けめぐる。決まって思い出されるのは子ども時代の記憶で、それは大抵の場合、美化されたものとして想起される。実際には、忌まわしい記憶も数多く無意識のなかに沈殿しているのだろうが、不思議とそうした記憶は意識の俎上に上ってこない。人は記憶を良き思い出として回想し物語るという仕方で、過去の自分との折り合いをつけ、自らの〈物語（＝歴史）〉を紡いでいく、そういう存在なのだろう。

子ども時代の記憶と言えば、川遊びの思い出が強く印象に残っている。少年時代を横浜で過ごした私は、学校が終わるとタモ網と虫かごを片手に、一目散に近所の川に向かっていった。横浜といっても南部の、しかも鎌倉に隣接する自然豊かな環境であったから、外遊びに事欠くことはなかった。採集するのは、コイの稚魚やハヤ、オイカワといった魚やザリガニ、カメ、モクズガニ等々。採ったものは家で飼育するのを常としていたから、ベランダは、瞬く間に水槽とプラケースの山と化していった。その光景は、さながらペットショップのようで、さすがにアヒルとシマヘビを家に連れて帰った時だけは、母にこっぴどく叱られたことを覚えている。

振り返ってみれば、子ども時代は空間感覚と時間感覚の双方において、大人のそれとは異質な世界を生きていたように思う。学校と家を基点に半径500mほどが生活圏であった自分にとって、その圏内が世界の全てであった。そこには、新たな発見と新鮮な驚きとが満ち溢れていた。そして、時が経つのを忘れるほど遊びに熱中した子ども時代。過去に振り回されることなく未来に気を遣うことなく、いま現在を真剣に生きるという時間感覚は、今となってはもう取り戻すことができないのかもしれない。

子ども時代 ――それは失われてしまってはいるものの、記憶という形でわれわれ大人の心のなかに残存している。この記憶こそが、次世代の子どもたちに文化を伝え、世代を繋いでゆく教育という営みの原動力となるのであろう。

大学教育研究会　研究発表

「弘学時報」第46号（2012年3月28日発行）でお知らせした通り、本学には「弘前学院大学・大学教育研究会」という組織があります。これは、以前の「弘前学院大学一般教育学会」を改称したものです。もともと、この一般教育学会は、専門分野に関わらず教員間の研究交流を図る目的で設立されたものです。これを受け継ぐ弘前学院大学・大学教育研究会では年に一度、研究発表と質疑応答を行っており、この研究発表会には会員でない人や学生も自由に参加できます。また発表者には非専門家向けとしての講演をお願いしていますので、多くの方々にご来聴いただけるものとなっています。

今年度は、去る3月8日に、文学部教授佐々木正晴氏（心理学）の研究発表を行いました。発表内容は以下の通りです。

（以上文責編集部）

「眼で見たものは本物か？　初めて見る世界／逆さに見える世界」

教授　佐々木正晴

先天性あるいは生後早期の眼疾患のために視・運動系の活動に著しい制約を受け、一定の生活歴を経てから初めてその障害部位を外科的に除去する手術を受けた人たち（以後、開眼者と呼ぶ）は、触・運動系の活動を介して日常場面に対処する強固な知覚行動体制を築き上げている。このような外科的手術を受けて視・運動系の活動を十分に展開する生理学的可能性を得ても、その視・運動系の活動を知覚行動体制全般に直ちに組み込むことは難しく、眼が開いても〝視覚的世界〟が自然発生的に成立するわけではないことが古典的文献からもよく知られている。このような開眼者の根底にある問題は、適切な学習場面が設定されないままでいると触・運動系の活動に全面的に依拠する盲人の状態に戻り、手術を受けた意味を失うことにある。

視・運動系と触・運動系の活動との乖離を埋め、視・運動系の活動が自立していく知覚学習過程について開眼者SM、KaM、ToM、YaKとの協同実験の結果から論考を加えた。

次いで、視野を上下反転するめがねをかけた場合の出来事について紹介した。

研究紹介㉑

除雪ボランティアの可能性

社会福祉学部　准教授　高橋　和幸

積雪地域に暮らす高齢者世帯にとって除雪は生活問題の一つとなっており、除雪ボランティア活動に注目が集まっています。私は除雪ボランティアを通じた共助コミュニティづくりに関する研究をしておりますが、まだ緒についたばかりです。出発点として、除雪ボランティアにも様々な活動形態があり、それぞれの活動に市民が参加することで得られる達成感や楽しみといったもの（魅力）を明らかにし、情報発信したいと考えました。

情報収集のため、積雪の多かった1・2月の東北6県と北海道及び新潟県で発行部数の最も多い地方紙を選び購読してみました。住民が手を携え、どういった活動形態で除雪にあたっているか、そして参加者の方々がどのような感想を紙上で述べているかを主に調べました。これにより多彩な活動形態が見えてきました。①住民の助け合いはもちろん、中・高校生の部活動としての協力、養護学校高等部生徒や障害者支援施設利用者が一人暮らし高齢者宅の除雪をしていました。②除雪先として高齢者世帯、障害者世帯が多いものの、通学路や保育所をはじめ公共施設の除雪作業の手伝い、空き家や廃校を活用して芸術祭を実施しているNPOが作品を雪から救うために除雪しているものもありました。③東日本大震災の被災者の避難住宅の除雪をしていました。④倒壊の危機に瀕したブドウ棚の除雪を大学生が手伝っていました。⑤伝統芸能の継承活動をしている人たちが発表する会場や雪まつり会場を除雪していました。⑥地域自主防災組織の冬場の活動として除雪ボランティアが行なわれていました。⑦防災協定を結ぶ都市から職員派遣を受けての除雪ボランティアがありました。⑧地域活性化を支援する広域ボランティアによる冬場の活動として除雪ボランティアが行なわれていました。⑨雪の降らない地域から参加者を募集し、除雪作業の仕方について講習会を開いて学んでもらいながら除雪ボランティアに従事して頂き、地元住民とも交流するイベントもありました。⑩除雪ボランティアに加え、冬場の定期的な高齢者宅への声かけをプラスする実践等も確認されました。

これらのように除雪対策を地域共通課題と認識しその克服に向けて様々な工夫がなされていることがわかりました。今後も活発な実践をしている事例を一つでも多く収集し、活動の魅力となる要素や継続できる理由、共通性を見出していきたいです。

社会福祉士・精神保健福祉士 養成校成績優秀者表彰される

この度、二〇一二（平成二十四）年度の成績優秀者が決まり、三月十九日に表彰状の授与が卒業式後に行われた。

この賞は、学業成績・人物ともに優秀で、社会福祉士・精神保健福祉士養成校の養成課程修了者に対し贈られるものです。

日本社会福祉士養成校協会成績優秀表彰者は、有馬圭祐さん、日本精神保健福祉士養成校協会成績優秀表彰者、佐野博之さんです。

両親学級が果たす社会貢献

看護学部母性看護学分野が主催する「両親学級」は三年が過ぎました。平成二十二年度の開催当初は年三回でしたが、要望も高まり、平成二十四年度は五回の開催となりました。母性看護学分野の教員三名で運営し、原則として予約制、一回の予約は五～七組としています。

開催テーマは「新しい家族を迎えるための準備」です。妊婦とパートナー、または家族を対象とした参加型両親学級です。近年、病院でも両親学級が開催されるようになりましたが、多くはウィークディに開催されているので、本学は当初から土曜日に開催しました。内容は、パートナーの妊婦疑似体験、分娩の経過について、お産の過ごし方と痛みの和らげ方、育児体験、そして個別相談に応じています。大学で開催する両親学級のメリットは、模型・妊婦用品・育児用品等の豊富な教材が揃っていることです。実際に触れ、使って体験できます。パートナーの妊婦疑似体験、ご夫婦、ご家族での赤ちゃんの抱き方・おむつ交換・授乳の練習が、全員が一斉に和気藹々と経験することができます。終始参加型の両親学級です。おむつ交換は模擬便を拭き取って新しいおむつを当てますから、手に便がついたり、衣服を汚したり実体験しています。さらに、妊婦健診時や分娩時に使われるモニターを用いての分娩時の過ごし方は夫婦ともに臨場感を味わうことができるようです。熱心にメモをしながら聞き入るパートナーに感心し、ご夫婦で抱き方やおむつ交換の練習をする姿を拝見して心温まる思いがいたします。こんなにご家族に待ち望まれて生まれてくる赤ちゃんは明るい未来が約束されているように感じられます。主催者として目指している「産ませてもらう分娩ではなく、自ら産む分娩、新しい家族を迎えるにあたってパートナー・家族も妊娠・出産・育児への協力と喜びを共有できる」が参加された方々に伝わったのかなあと思う一瞬です。

社会貢献の趣旨が認められ、母性看護学分野に平成二十二年に「青い森ファンド」、平成二十三年に「みちのくふるさと基金」から助成金を受け、両親学級の運営費の一部とさせていただきました。改めて関係者にはお礼申し上げます。今後も、継続していきますので、地域の皆様のお役にたてればと願っています。

（文責　教授　櫛引美代子）

学生を中心とした実習指導に向けて

社会福祉学部　三年　花田千朱希

青森県社会福祉士会主催の実習指導者スキルアップ講習会にて、学生の視点から実習指導での課題について報告させて頂きました。そこで私は「希望した実習先と実際の実習内容との相違」についてお話ししました。具体的には、実習前に希望していた機関とは別の機関での実習が中心となり、私自身その機関での実習を続けたいという思いが強くなってしまい、実習先と実習内容に相違が生じてしまったということでした。学生の報告に対して、福祉現場の方々から様々な助言やご質問を頂き、各グループに分かれてグループワークを行いました。私の挙げた課題の背景として、実習生の施設・機関の理解不足、実習プログラムが変更できない環境、新カリキュラムによる実習受け入れ機関の不足等が挙げられました。これらの対策として、合同施設説明会の開催、実習指導者・養成校教員・実習生三者の対等な関係性、上記の三者で実習プログラムを作成する、希望する機関を二次的機関として依頼する等が挙げられました。

この二日間の研修を通して、本当に貴重な経験をさせて頂きました。福祉現場の方々とグループワークを行うこと自体、私にとって初めての経験でした。また長時間に渡り福祉現場の方々と意見交換をするということも、普段の大学生活ではなかなか経験することのできないことです。そして、福祉現場の方々の対応を拝見し自分の未熟さを痛感したことも含め、本当にたくさんの学びや気付きを得ることができました。この貴重な経験によって、今後の目標もより明確になりました。現段階での社会福祉士は憧れや目標となっていますが、今後その憧れや目標が現実のものとなるよう、勉学はもちろんのこと、様々な人との関わりを大切にし、残りの大学生活をより充実させていきたいと思います。

中南支部社会福祉士会研修会「実習指導者スキルアップ研修会」

日時：2013・2・23(土)・24(日)　会場：ホテルニューキャッスル弘前

①学生と現場実習指導者とのグループワーク

②学生を中心としたスーパービジョン

③グループワーク後の報告

文学部 卒業論文・卒業レポート発表会

文学部では、2012年度卒業論文・卒業レポートの発表会を行いました。その内容は、以下の通りです。

■英語・英米文学科

１月29日

山内一透（フォーサイスゼミ）

A Comparative Research of the Importance of Gestures between Japan and America with Historical Backgrounds and Conception

松橋紫里（森田ゼミ）

「シャーロック・ホームズと19世紀イギリス社会 ―ヒーロー登場が望まれた時代―」

伊藤翔太郎（川浪ゼミ）

「シェイクスピアの悲劇における異化の効果について」

浜田夏妃（川浪ゼミ）

「イギリス近代の大衆娯楽について　―演劇を中心に―」

■日本語・日本文学科

第１日（分科会形式）

１月31日(木) 10：20～11：05

Ａ会場：日本語学／日本語教育系　408教室

「新語の研究　－ゆるキャラの命名－」安田知紗

Ｂ会場：古典文学／民俗学系　410教室

「『南総里見八犬伝』の研究ー伏姫物語から見る犬の役割ー」小原志穂

「『好色一代男』に描かれた遊女の姿」下斗米弘衣

「『男色大鑑』研究」山内泉

「人が鬼になるメカニズム」小松原新三郎

Ｃ会場：近現代文学／サブカルチャー系　411教室

「映画と日本文学ー谷崎潤一郎における文学と映画の連関性」渋谷遼亮

「村上春樹論ー暴力の在り方」福士大

「川上弘美論　川上作品に見る『境目』」小川一大

「ライトノベル論」藤井夕紀

第２日（全分野合同形式）

２月２日(土) 12：40～　320教室

「角田光代論ー「対岸の彼女」の解釈ー」佐々木健太

「川上弘美論ー『七面鳥が』に見る現代女性と居酒屋ー」後藤由紀

「鳴海要吉論」古川和香

「日本文学における音と言葉の重要性」齋藤周三

（文責　文学部教授　井上諭一）

－2013年度－
看護学部学内就職セミナー
弘前学院大学独自の企業説明会
2013年 5月25日(土)
午後1時～ 4時まで
場所　弘前学院大学 体育館
いながらにして
企業を知るチャンス!!
合同就職委員会

2012年度　理事長賞授与者

文学部　英　語・英米文学科　浜田　夏妃（青森県立八戸商業高校卒）
日本語・日本文学科　後藤　由紀（青森県立木造高校卒）
社会福祉学部　社会福祉学科　佐藤　知美（岩手県立水沢高校卒）
看護学部　看護学科　小山内　萌（弘前学院聖愛高校卒）

人と場所

文学部　英語・英米文学科卒　浜田　夏妃

４年前、西弘前駅から道を尋ねて訪れた弘前学院大学を今はもう卒業してしまいました。あの頃大学生活に憧れを持っていた私が想像していた学生になれたのかどうかは分かりませんが、想像以上の出会いや経験を体験することができました。それと同時に大学生活は私の視野を広げ、生き方を改め、目標を定めてくれるものとなりました。

私の現在の目標は日本語教員になることです。大学では日本語教育に関わる講義を選択し、日本語教育は学校と学習者だけの関係性だけでなく、社会の中で日本語を必要とする外国人や、日本人にも関わってくる教育なのだと知りました。そしてそれを教えられる場所は学校だけでなく、学びたい人と、伝える人がいれば、いつでも、どんな場所でも可能なのだということを知りました。そうして私は、日本語教育を場所を限定せずに、必要とする人や環境に合わせて、様々な場所でそのような活動に携わっていくことを決めました。

また、卒業論文ではイギリスと演劇との関係を研究しましたが、当初演劇が行われていたとされる教会から舞台が外へ移された頃、舞台は普段の生活場面にステージを設けて行われていたという事実がありました。演劇と日本語教育とは少し役割は違いますが、娯楽を求める人と、演じることでいろいろな思いを伝えたいと思う人がいればどんな場所でも劇場になったと考えると、人と場所において共通点があるように捉えることができます。

そして大学生活を振り返るとやはり思い出されるのは人と場所です。私にとって弘前という場所はとても大切な場所となりました。しかしそれ以上に大切なものは人です。弘前で出会った人と別の場所で再会しても、また同じ気持ちで出会いたいと思います。そして大学で培った力を新しい場所で新しい人に向けて生かしていきたいと思います。

オーダーメイドの四年間

文学部　日本語・日本文学科卒　後藤　由紀

皆さんの四年間は、どのようなものだったでしょうか。ありがちな表現ではありますが、振り返ってみると、私の四年間はあっという間だったと思います。一限目の講義に間に合わせる為に朝六時前に家を出たことも、五能線の運行を駅で待ったことも今となっては良い思い出です。

「レポート」が何をさすのか分からず、不安になりながら提出したこともあります。質問の意味さえ理解出来ず、ただ講義を聞くという状態だったこともあります。そして、ぎりぎりになって今までにないくらい焦って書いた卒業論文など、お世辞にも真面目と言えないことも沢山思い出されます。

しかし、今では自分は何が分からないのか気付き、皆の前でも積極的に質問したり意見を述べたりすることが出来るようになりました。また、一人でやった方が早い問題に、あえてグループで取り組むことの意味も分かります（私は指摘の仕方が下手なのでもう少し練習しなければならないと思いますが）。

四年間で様々なことが出来るようになったのは、ひとえに先生方のおかげだと思います。いつでも私たちを正しい方向へと導いてくれました。手探りで進んだとその時は思っていても、しっかりとパンくずが落とされていたことにようやく気付くことが出来るようになりました。今度はどちらに進むか自分で決め、間違っていたら一旦立ち止まり方向を修正するという作業を自ら行わなければなりません。方法は自然と身についていると思います。後は怖がらず踏み出して行くだけです。その時も支えてくれる方々への感謝は忘れずにいたいと思います。

祝卒業

多くの方々に支えられて

社会福祉学部　社会福祉学科卒　佐藤　知美

私がこうして卒業の日を迎えることができたのは、これまで出会った多くの方々のおかげであると思います。四年間を共に過ごした仲間、大学の先生方、地域の方々との関わりを通して、大きく成長できたと感じており、感謝の気持ちでいっぱいです。

大学生活の中で特に印象深いのは、精神保健福祉実習です。その実習指導者の方に教えていただいた「ソーシャルワーカーは自分自身を道具とする職種である」という言葉は、今でも私の心に強く残っています。道具の特性を理解する、つまり自分自身を理解することは専門職として大切であると学びました。

弘前学院大学で学んだ知識とキリスト教の精神を今度は私が伝える側になります。誰の目を気にするでもなく、私は私がやるべきことをしていくだけだと心に刻み頑張っていきます。最後になりましたが、四年間本当にありがとうございました。

大学生活を振り返って

看護学部　看護学科卒　小山内　萌

弘前学院大学では授業や看護実習、卒業研究などとても充実した四年間を過ごすことができました。

一年生の頃は、勉強することが多く、勉強の方法にも戸惑いました。しかし、勉強していくうちに、人体の構造・機能、基礎看護技術、各発達段階や疾病に応じた看護など、それら全てを関連づけ、なぜそうなるのかということを理解できるようになりました。

三年生からは本格的に看護実習が始まり、様々な患者さんを受け持ちました。疾患や、年齢、生活習慣が異なる患者さんの個別性を考慮して看護計画を立案するために、アセスメントが重要だと学びました。患者さんの日常生活動作をよく観察し、コミュニケーションを通して情報収集を行いました。会話が難しい患者さんを受け持つこともあり、会話の内容だけでなく、患者さんの表情、動作、バイタルサインなどからも患者さんの状態をアセスメントするように努めました。

また、病院は患者さんにとって生活の場です。患者さんは入院した初めの頃は、特に病気の不安や症状に苦しんでいることが考えられます。そのような患者さんの話を傾聴し、安心して入院生活を送れるような援助を行いたいと思いました。長期入院している患者さんは、行事に参加し、趣味などを行うことによって、気分転換になり、治療や生きていく意欲にもつながることを学びました。

卒業後、臨床でも患者さんの身体面・精神面・社会面をよく観察し、患者さんに寄り添った看護をしたいと思います。そして、これからも様々な患者さんやその家族に出会い、多くのことを学んで成長していきたいと思います。

大学の四年間で、実習や卒業研究など多くのことを経験しました。先生方や友達の助言・支えがなければ乗り越えられなかったと思います。お世話になった先生方、友達、家族には感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

大学院生活を振り返って

大学院　文学研究科修了　久保田諒介

とにかく時間の経過が早い二年間だった。もう少し研究がしたい、学部時代に取れなかった資格を取得したい、就職までの猶予が欲しい、という欲しい尽くしの理由で進学した大学院生活は、私が考えていた以上に得るものが多かった。正直な所、勉学の面で得たものよりも、日々の生活の中で得たものの方が多かったように思う。

学費と生活費の確保、そして後学の為に、五月から十月までの半年間、西目屋村にある縄文時代の遺跡で、発掘作業員として働いた。発掘の現場やその作業過程を目にし、実際に発掘作業に携わるという経験は、学芸員を志望する私にとっては非常に貴重な体験だった。また、作業員として働いている様々な世代の方とのコミュニケーションは、発掘の裏話、昔の弘前市、就活や研究に対しての激励など、普段同世代の学生と話す機会の多い私には新鮮なものだった。

また、研究と就職活動の両立は、辛い反面楽しくもありました。就職活動で訪れた町の博物館をできる限り見て回るというノルマのもと、大部分を徒歩で見聞した地域の博物館からは、面接のネタやその地域に関する知識だけではなく、自身の研究にあたっての当面の課題を考えるよい機会を得られた。

修士論文との長い戦いも忘れられない。研究したいことを把握していつつも、取り留めのない文章が積み上がっていくもどかしさ、迫ってくる中間発表会と学会の締め切り、決まらない就職、二十三歳にもなってボロボロ涙を流して泣くという経験もなかなかできるものではない。とはいうものの、それまで積み上げられた取り留めのない文章が整理され、一気に完成されていった最後の一ヶ月間は、これまでの六年間で一番「勉強した」という達成感を得た。大学院生としての最後の一年は、これまでひっそりと積み上げてきた経験が形になった一年だった。

さらに、実習先で出会った利用者さんや患者さんとの関わりを通して、自分自身をゆっくり見つめ直すことができたと思います。自分の言動の背景にあるものは何か、常に振り返りをしました。そのような過程の中で、今まで見ないようにしてきた自分の嫌いな部分が、明らかになり、不安に感じたときもありました。また、今まで気がつかなかった自分の特性を知り、悩んだときもありました。しかし、そんなとき私の周りには、声をかけ支えて下さる実習指導の先生や仲間の存在がありました。このような幸運な出会いに恵まれていなければ、人との関わりによって自己を見つめ直すことも、つらさを乗り越えることもできなかったと思います。改めて、多くの方々に支えられ生きていると実感しました。

四月からは、社会人としての生活がスタートします。今まで以上に多くの方々との出会いが待っていると思うと胸が躍ります。人と出会い、関わり、繋がっていられることへの感謝の気持ちは、これからも忘れたくありません。また福祉専門職の一員として、自分自身を理解する努力を続けていこうと思います。

最後にこの場をお借りして、もう一度、これまで支えて下さった方々に心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。